

【平成20年度大会企画より】

講演 「宗教にみる日本現代社会」

0. 司会者より

講演に先立ち、講師のご紹介をいたします。薄井篤子先生は、九州大学で宗教学を学び、その後は神田外語大学や東洋英和学院大学などで教鞭を取るかたわら、国際宗教学研究や日本宗教学会の役員などをつとめながら、精力的に研究を行っていらっしゃいます。

ご専門は、宗教社会学で、女性と宗教の問題に取り組み、最近では明治から現代に至る「新宗教」や仏教・キリスト教の教団における女性の問題などを扱っていらっしゃいます。

編著書に、『女性と教団…日本宗教のオモテとウラ』（ハーベスト社刊、一九九六）、『かわりゆく家庭と宗教はどう対応しているのか？』（国際宗教学研究編、二〇〇〇）、『ジェンダー研究が拓く地平』（原ゼミの会編、文化書房博文社刊、二〇〇五）などがあります。では、先生お願いします。

神田外語大学 薄井篤子

一. はじめに

ただいまご紹介いただきました薄井篤子と申します。いくつかの大学で教えながら、宗教学の研究をずっと続けています。今回は大事な学会の時間に発表をさせていただくという機会を頂戴し、心から感謝いたしております。ただ、教育学部の中で話す機会は初めてでもあり、皆さまの日本宗教に対する関心にお答えできるような発表になるか自信ありません。非常に大きなタイトルになっていますが、「何故、日本には多くの宗教教団があり、活発に活動しているのか」「その信者たちは何を信じ、どのような信仰生活を送っているのか」という素朴な疑問がその根本にあるのではないかと受け止め、私が日頃に教団調査をする中で感じていることを中心にお話させていただきます。ただ、実際には現状の一部を言及するに過ぎず、また、時間の関係もあって具体的な詳細よりも大きな潮流や特徴を指摘して終わりそうです。ナイーブな事象をざっくりと切り取るためには

ころびが多々見えることをあらかじめお詫びいたします。色々と質問や疑問をご提示していただくことで発表の不足を補えればありがたく、どうぞよろしくお願いいたします。

二、現代世界における宗教の動向

(一) 今、宗教に何が起きているのか

― 宗教的なるものの拡散と先鋭化

まずは現代社会とそこでの個人の関係性についての見取り図を簡単に描いてみたいと思います。西欧諸国や米国では、とりわけ大戦後、福祉制度と消費社会の成立にしたがって「世俗化」が進行し、宗教の公的影響力は衰えました。科学技術が発達し、合理主義が浸透すれば宗教への関心は薄れるであろうという予測は、ある程度まで、ある時期まで当たっており、伝統的既成宗教の行事に参加しない人が増え、宗教離れが進みました^①。しかし、二十世紀の後半になってきますと、だんだんと科学万能主義、物質主義に対する反発が強くなり、いわゆる六〇〜七〇年代のカウンターカルチャーを引き継ぎながら、その土壌から「ニューエイジ」^②が登場し、それ以降、「宗教的なるもの／聖なるもの」への関心が高まってきました。これは「伝統的宗教 religion」に回帰するのではなく、伝統的なるものとは違う宗教性を模索するという動向であり、「スピリチュアリティ spirituality」「スピリチュアル spiritual」という言葉で表現されています。この用語はすでに現代社会では市民権を得た感がありますが、実際にはかなり幅広く曖昧性を残しています^③。ただ、その重要な点は、現代人の宗教行動は組織され

た宗教に帰依することから離れ、個人化された形式の私的探究へと向かう動向を指摘することです。宗教が私的領域へ格下げされた「私事化」の傾向が強まった中で、宗教制度によって公式化されたパッケージを選ぶよりも、自分であつらえた宗教生活を作り上げるために、個人はさまざまな宗教的オプションの中から取捨選択するようになっていきます^④。こうした過程は宗教の衰退ではなく、「見える」宗教的制度から個人化された宗教への移行をもたらしました。

その一方で、共通の価値的基盤を求める方向も強くなってきました。大勢の人が共有する価値観の明確化が志向され、「公共的な宗教」といったものを求める動きとなっています。それはいわば「脱私事化」と呼べる傾向です。アメリカの大統領選における議論を見ると、そうした傾向が非常に痛感されるわけです。その中で、フアンダメンタリズムという原理主義的運動が台頭しがちな状況もみなさんはずでにご存知のことかと思えます^⑤。二十一世紀に入って宗教は共同体の価値や秩序体系として、再び、政治的公的なアリーナに舞い戻ってきたという状況にあります^⑥。一方では、非常に多様な個人的な関心で選択されつつ、もう一方では、共有しているものを再確認するために規範や秩序を明確にする動きがあり、それらが重なり合ったり、すれ違ったりしているという現状です。

(2) 日本社会における宗教の位置

ご存知のように日本では、宗教とは何なのかわからない、具体的な宗教体験がない、自分の生活には全く関係がないという

宗教への無関心層が非常に増えています^⑦。お配りした資料は『宗教年鑑』という文部科学省が毎年出しているもので、いわゆる宗教法人の宗教団体の数、また信者数が判る資料です。相変わらずわが国の信者数は二億を越えているという状況になっています^⑧。神道系と仏教系の両方、複数のものに帰属しているという状況、宗教に対する明確な帰属意識がないまま信者としてカウントされているという現状は変わりません。むしろ習俗というかたちで七五三や初詣や厄払いが盛んになっており、神社に足を運ぶ人の数も増えているかもしれませんが、様々な宗教の施設が身近にあり色んな形で触れ合っただけながらも、それに対して親密な帰属感とか、自分の生活に結び付ける機会や営みがほとんど無いと言えるでしょう^⑨。

他方、いわゆる伝統的な行事や習慣には関心が強くなっており、祭りが観光資源や町おこしとして盛り上がるとか、仏像鑑賞や巡礼に行ってみるとか、非常に幅広い層で神仏という超越的なものと触れ合う機会や空間を求める動きが目につきます。「伝統的な日本人の心」とか「日本人の魂の故郷」のような括り方で、今まで見失っていたものが再発見されつつあるということでしょう。と同時に、日本でも、以前から根強かった霊的なものへの興味・関心が世界の潮流の中で再浮上し、いわゆる江原啓之氏のような霊界からのメッセージから、占いや呪い、ヨガなどの修行のような身体への関心にまで幅広く広まっています。そうしたブームや人気はメディアの影響力抜きには語れません^⑩。また写真集とかDVD、様々な関連グッズが溢れており、それらを通して私たちは宗教的・聖なるものへの関

心を高め、お金を払って手にし、達成するという消費行動を行っています^⑪。こうした宗教の自由市場とも言うべき動向においては、超越的なものの強調が効果的であることもわかっています。全体的には日本でも、既存の宗教の存在感は希薄になる一方で、幅広い宗教なるものへの関心が強くなってきたという状況が目につきます^⑫。

そうした宗教状況と接点を持つものとして注目したいのは、九〇年代から徐々に広がってきたセルフヘルプ運動です。専門家に助けてもらうのではなく、例えば、アルコール依存症とか拒食症とか、不登校やいじめられている子どもをもっている母親たちや、同じ病気の患者同士など、苦しみや辛さを抱えている当事者たちが同じような境遇にいるもの同士で助け合うという様々なセルフヘルプの試みが身近で生まれてきました。この活動を「宗教」として見ることはできませんが、「同苦共同体」とも言えるこのネットワークは「救済の力」を考えさせる面があり、宗教に繋がっている周辺領域と考えます。権威や専門性をむしろ排除し、同じ苦しみをもっているからこそ理解し合えることに大きな「癒し」の力を見いだすその営みにおいてはスピリチュアルな要素が強くなります。

また、近代は「死を隠す社会」ですが、最近が高齢化との関連もあり、病いや死へのまなざしが大きく変化しています。それは葬送文化の変容に現れています。先祖供養や家の継承が希薄になり、お寺やお坊さんに頼るのではなく、「自分らしい」葬送のあり方を模索するという主体的な動きがあつという間に広がりました。戒名の見直し、さらに散骨や樹木葬などの取り

組みも今では珍しくなくなりました。葬式に比重がある日本の寺院にとっては非常に大きな変革を迫られており、仏教寺院そのものの役割を問い直す動きにつながっています^⑧。葬送以外にも、多様なケアの領域においてようやく当事者主体の視点も重視され始め、医学の専門家を中心とするのではなく、患者本人、心理の専門家、ソーシャルワーカー、ボランティア、介助人、宗教者などがそれぞれの立場から生と死をめぐって語らう動きが活発です。こうした動向においても個人の自発性と新たな共同体の構築が重要になっており、そこでもスピリチュアルという言葉は非常に大事なキーワードです。

三. 変容する宗教から見えてくるもの

(一) 新宗教の特徴と展開

私が具体的に研究しているのは、いわゆる「新宗教」と呼ばれている教団です。非常に熱心に信仰活動をしている人たちの調査を長年行っています。教団に所属して活動している方々は確かに一部の人たちですが、かなり巨大な教団もあり、それらの人々の共有している価値観や行動の理念を通じて、時代精神や社会構造を理解できるのではないかと考えています。組織性が非常に強い集団への拒否感が強い日本社会においては、新宗教教団や信者は相変わらず了解しがたい存在で、両者の間には深い溝が存在しています。しかし「新宗教」という言葉はいわゆる研究者やメディアが使うもので、『年鑑』でも「新宗教」というカテゴリーはありませんし、「自分たちは新宗教です」と自称するような教団や信者はありません。仏教系か神道系か

キリスト教系や諸教系のいずれかであり、伝統宗教を現代社会の中で生かしているのだと自己認識している人たちです。ですから、研究上は「新宗教」として分類する必然性はありませんが、異種で独特なものとして見なすと事実とかけ離れて本質がわかりにくくなってしまいう危険性もあります。むしろ、変化しにくい伝統宗教よりも時代性を明確に表出するものとして新宗教を位置づけ、そこから宗教の社会的位置と役割を理解しようというのが私の立場です。

簡単に新宗教の歴史を概観しておきます。日本では社会の大きな変革期に新しい宗教運動体が多数生まれ出てきました。特に江戸幕末から伝統的な宗教の組織や教団と違う特徴を持っている運動体が次々と生まれており、「新宗教」として捉えています。その規模も大小様々で、『新宗教教団・人物事典』には三百余の教団を紹介しています。その中でいわゆる代表的な新宗教教団についての基礎資料をお配りしました(表1)。「新」と称されていてもすでに長い歴史を持っており、大きな社会変動を経ています。戦前から始まって、そして戦後非常に大きくなった教団をここでは「代表的な旧の新宗教教団」として挙げております。新宗教は、自分が教えに惹かれて自分が入信するのですから「信仰の自発性」が大きな特徴です。また、教祖や開祖は一般人ですから生活に密着した分かり易い教えを説き、誰でも取り組み易い実践を求めます。病気を治すとか、人間関係の改善とか、この生活の中で幸せになりたいと願う気持ちに対しては専ら「心直し」が強調されます。自分の心のあり方を顧みて自分の欲望やエゴを反省し、その上で生きていることの

有り難さを神や先祖などに感謝する。そうした生き方を身につけるためにはリーダーの指導が大きな力になります。伝統的な宗教の場合は、専門的な知識を持つとか、厳しい修行をおこなった指導者の権威が大きいけれども、新宗教の場合は同じような生活をしている人たちから身近な指導を受けますし、自分も他者に伝えていく中で宗教的知識を身につけていく実践が重視されます。その場として小集団で語り合う場が非常に重要になります。そこを基盤にして緊密な人間関係ができあがり、家族以外に「家族的なつながり」を持つことが救済として機能します。初期はいろいろなグループが続々と生まれて活気ある組織性が特徴ですが、信者が増加してきますとどうしても合理化・官僚化し、社会性を担うことで穏便さが身についてきます。

(二) 新たな宗教変容の顕在化

一方、一九七〇年代後半以降、それまで大教団として君臨していたものとは違う教団が生まれて、社会の関心を惹くことが多くなりました。表2に掲げているような新しい教団群を「新新宗教」と称する場合もあります。この言葉の妥当性については賛否ありますが、いずれにしてもこの時期に大きな曲がり角を認めることにはある程度の共通理解があります。「どんどん」「もつともつ」を掛け声にして生きてきた日本人が立ち止まった、今までとは異なった生き方というものを模索し始めた時期なのでしよう。膨張し官僚化した社会全体および宗教教団に対するアンチテーゼのようなものが新新宗教の中に感じ取られました。外部の社会とは距離をおこうとする「隔離型」と呼ばれる

ようなグループが出てきます。集団に属すること自体を好まない、ゆるい人間関係でつながる「個人型・ネットワーク型」も目につくようになってきました。隣人や家族、身近な人との関係に関心を持つのではなく、自分の中に眠っている潜在力や可能性に注目し、それらを開発するための厳しい修行や神秘的な体験が重視される傾向も強くなっています^⑭。こうした展開の中には当時のニューエイジやスピリチュアルな動向が色濃く反映しています。

いくつかの教団は社会との摩擦、とくに信者の家族との摩擦・衝突を起こすようになり、メディアに散々話題を提供しました^⑮。オウム真理教も新新宗教の代表的教団の一つだったと言えるでしょう。実際に脅しや恐喝まがいの行為をおこなっていた団体があつたことも事実ですが、やや過熱気味の宗教報道によって信仰集団の異質性や反社会性が強調され、宗教に帰属すること自体への拒否感が広まってきました。新宗教や新新宗教だけではなく伝統的な教団宗教にも非常に社会の目が厳しくなり、既存の宗教制度に違和感を覚える層が一気に浮上しました。前述した葬送の自由化などもその傾向を受けて拍車がかかったと言えます。

四. 新宗教の現在

(一) 在家主義と菩薩行の現代的意義

そこで、私もこうした様々な傾向がどのように反映しているか改めて新宗教教団を調査しているところですが、今回はその動向についてある程度把握している点から霊友会、立正佼成会、

創価学会、真如苑の最近の資料をお配りしました^⑩。真如苑はやや新しいタイプに分類される場合がありますが、成立は古く、戦前戦後の時代の特徴を抱えつつ新しい時代にも対応できている教団だと思っています。いずれも大教団で、長年に渡って安定した組織を維持していますが、信者が多い分その要請に誠実であろうとすれば社会の変化には敏感にならざるを得ません。一時期の勢いはもはや望めないでしょうが、宗教批判が吹き荒れた時期を経て問い直しや見直しを行ってきたと見ています。多くの教団の中の一部にすぎませんが、現代社会で何が求められているかを考える上ではやはり示唆的なケースになりうると考えています。

霊友会、立正佼成会、創価学会は日蓮系仏教教団、真如苑は大般涅槃経を所依とする密教系の教団です。いずれも大乘仏教なのは言うまでもありませんが、それを徹底化する中で精神的な活動力を発揮しました。仏教系新宗教の場合、仏教の基本精神である「慈悲」の考え方を「在家主義」というもう一つの特徴と結びつけて「みんなが同じ立場で同じ存在として関わりあって支えあう」精神を育んでいきます。特別な修行や難解な知識の指導を専門家中心で行うのではなく、「みんなが素人なのだ」という立場から始めることです。どの教団も教義の学習は必要ですが、教義と自分の体験を結びつけていくことが重視されます。そして、さらに「菩薩行」の中でそれを実感・実践していきます。「菩薩行」以外に「利他主義」など表現は違いますが、基本的には「人のために」ということです。「人のため」というと自分が偉そうで「自分が助けてやる、導く」と

いうことになりがちなのですが、基本的には在家主義でありますから、自分自身の至らなさや不完全さというものから出発します。同じように悩み苦しんでいる人に「自分もそうだった」と語りかけ寄り添うことによって、共有する時間の中で癒され、問題解決の糸口を見つけていくのです。新宗教は強引な布教や伝道で話題になりがちですが、組織を大きくするためというよりも、同じような状況や立場で苦しみ悩んでいるという水平的な状況の中で互いが結びつくことで大乘仏教の理念を実現していくのが基本理念です。創価学会は「座談会」、立正佼成会は「法座」、霊友会は「つどい」、真如苑は「経(すじ)」という、いずれも小集団での語り合いを信仰の原点として非常に効果的に運営してきました。その磐石な組織性が上意下達的な教団イメージを作り上げていましたが、現在はむしろ、各地区において同じような悩みを抱えている人たちのセルフヘルプ的な活動として展開する面が強くなっていると感じています。

(二) 家庭を支援するネットワークとしての新宗教

私は現在、とりわけ家庭教育活動に着目しています。教団によって「家庭教育」と銘打って行っているところもあれば、内容的にそう判断できるものまでさまざまです。親子の関係を軸として夫婦、嫁姑、兄弟なども含まれた「家族関係をめぐる問題」は新宗教の真骨頂であり、今始まったことではありません。私が改めて注目するのは、活発だからという理由からだけでなく、教育基本法の改正などで「家庭教育」が非常に強調・奨励されている現状を意識してのことです。宗教団体が国家政策

の下受け機関のような機能を果たすことは歴史が明らかにしていますから、宗教教団の家庭教育活動も政府の要望に従うものという見方を全く否定することはできません。実際、健全な家庭を築くことは日本社会の再建につながる最大重要課題であるとして政党と連携して家族再生運動を展開している宗教団体も多々あります。ただ、家庭の現状についての考えや取り組み方にも多様性があり、その中での新宗教のポジションを理解するのは無意味ではないと考えています。

現在、競争が低年齢化している一方で、子どもの自発性を尊重すべきだ、基礎学力が重要だ、生活習慣が重要だ、目標を見つけさせよう等々の理想論的な「家庭教育」論があふれていきます。家庭教育の重要性に対する政策的・社会的関心が著しく高まり、教育産業がそれを煽る現状では、子どもに対して「適切な」家庭教育を施すということそのものが難しい課題になっています。どれだけ実践すれば、十分に親としての責任やつとめを果たしたことになるのか不明のまま、現在のように家庭の責任、親の主体性を強調されるだけでは親は大変な負担と葛藤を抱え込んでしまうのは当然です。

新宗教の場合の家庭教育は「よい子ども」になるよう指導する方法や秘訣といった内容ではなく、むしろ「親が反省する」点に重点が置かれます。他者の仏性に気付くというのは伝統的な仏教の理念ではありませんが、それを親子の関係において「子どもから学ぶ」「子どもを尊重する」という姿勢を身につける学習が新宗教の家庭教育と言えます^⑩。過重な責任感ゆえに子どもと自分との距離をつかみにくく、子どもを抱え込んでしま

いがちな現代の親の心理状況においては一定の効果があるようです。従来の活動では小集団のつどいが年配者・先輩の家庭指導を受ける場になっていましたが、現在は同じ悩みを抱えるものが集まり、当事者が悩みを吐露し、語り合う中で答えをわかめるようなやり方へ移行しています。社会の押し付けと現実の間で葛藤を抱える母親たちが力をつけていく場にもなっています。立正佼成会は婦人部員が積極的に家庭教育を学び、支部や地区での法座とは別に会員同志で勉強会や集まりを行ったり、講演会を開催したりして、地域にも広く参加を呼びかけています。非会員であっても、教会での家庭教育講座の内容に惹かれて足を運ぶ母親・父親の数が増え始めています。同会は地域の教育関係団体や自治会との連携を推進しているので、そうした支援が大きいのは事実です。その際には宗教性を押さえ、勧誘行為も行わないのですが、それでも入信する人たちが出てくるのです。また、霊友会では一九八〇年から障害者・その家族・介護者による『三者の会』を支援していますが、そうした形態での家族支援は貴重でしょう。また、教職や福祉職に携わっている信者たちは自分の職務を生かして相談事業を主体的に展開しています。たとえば創価学会は一九六八年に教育本部を開設以来、全国に教育相談室を設置し、現在もカウンセリングを学んだ約九百人の教育部員がボランティアとして不登校やいじめ、摂食障害など地区での相談活動を行っています。気軽に相談する機会を持ちにくい日本社会においてそうした取り組みは貴重です。その主体が母親に集中しがちな点は一般社会の風潮と同様であり、そこは改善の余地を感じますが、まだまだ母親

が育児全般の責任を担っている現状では仕方がないかもしれせん^⑧。何よりもそれらの実質的な効果は育児担当者の孤立、ひいては家庭の孤立を防ぐことができる点にあります。最近は同様の子育て世代のグループが多く生まれており、各市町村でも母親教室や育児支援活動を推進しています。新宗教の場合も基本的には同じものとも言えます。ただ、調査でそうした活動の場に参加すると、まだまだ情報はさほど行き届いていないし、そのような場を欲している母親が多いことに気づかされます。

もちろん、新宗教ならではの特徴は確認しておかねばなりません。「家族が大事」「家族が基本」という正面から反駁するのが難しいスローガンを強調する傾向は確かにあります。しかしそうした「お題目」を唱えるのは何も新宗教団体だけではありません。家族の孤立・家族の個人化が強まっていく中、育児不安・登校拒否・いじめ・拒食／過食・離婚・夫婦のすれ違い・家庭内暴力・離婚・未婚など、家族の苦悩の多様化と重さは以前とは比較できないものになっています。新宗教にはスローガン通りに行かない現実とできない自分に直面した人たちが集います。その苦しむ時間をさまざまに支え、その体験に意味を付与する枠組みを持っている点が強みでしょう。そうした「問題」を通して個としての脆さに直面し、他者との交わりの中でどれだけそれを克服できるか、「家族」はその学習や鍛錬の場に位置づけられているのです。また先祖供養は仏教系新宗教の大事な一つの理念かつ実践ですが、現在は「いのちの源」とか「いのちのつながり」といった表現を強め、孤独な自己を支えてくれている大いなるものへの気づきとして機能しています。この

ような活動は信者同士のセルフヘルプ活動ではありますが、信仰の有無に関わらずに広がっていく場合も珍しくありません。その点で格好の布教の機会になっているとも言えますが、ただそれを意図的なものと見てしまうと葛藤を抱えている人が支えや手立てを求めている現在の状況とそこで一定の効果を上げている点を見えにくくしてしまします。

さらに、自分の悩みの体験を原点として、そこから社会との向き合い方―自分の生活している地域社会、世界の様々な場での苦しみ悩んでいる人を共感的に理解する道筋―が設定されている点が大きいと考えます。大教団には近所の交際から始まって地域のボランティア、募金活動や国連支援などの国際援助等々まで、できる範囲で社会活動を展開していく機会が多くあります。特に最近は社会の弱者としての子どもたち支援、子どもの視点に立った社会建設という側面が強くなっています。創価学会ではユニセフとの関係を強めて「子どもの人権」展示会や出版を推進していますし、真如苑では海外の教育支援にいつそう力を入れていきます。以前より、次世代の信者育成として青少年層向けの活動は盛んでしたが、現在の傾向としてはもっと普遍的な意義を付与されて広がっていると感じます^⑨。

五．現代の宗教に求められるもの

―当事者性とゆるやかな共同性―

あらためてその近代以降の宗教動向をめぐる理論や概念を見ると、基本的には「個人化・個性化が進むと人は宗教から離れ

るのだ」という理解が優勢でした。しかし、実際にはそう単純ではなく、きわめて複雑な軌跡をたどっているというしかありません^⑩。現代は自己の自律と責任を強調する社会であり、意味の供給と帰属に関わる機能が私的領域の諸制度に移された今、自分の行為の動機づけは自分で絶え間なく選択し修正する中で行わなければなりません。もはや既製品の伝統的な枠組みには依拠できないものの、全く捨て去ったわけでもなく、伝統の断片や要素を文化資源として個人的な動機づけや意思決定に活用しているのが現状でしょう。社会と個人の距離がかけ離れてしまうと、安定したアイデンティティを構築するのに困難が生じる危険がありますので、ニューエイジからスピリチュアリティ運動によって表現されている全体論的な世界観は、全体的な感覚を獲得することで生活のすべての側面を統合したいという現代人の願望が表現されていると言えます。ただ、脱呪術化した日常から敢えてスピリチュアルなものへ近づこうとしても、総消費社会における現代の宗教性は物質的市場的価値によって提供されるしかありません。その中で新宗教の提示する枠組みは、濃密な人間関係の中に身を置くことで具体的な共同行為の実践へと橋渡しする機会を与えています。その点で、その個と集団のバランス感は孤立が進む社会において安定した効果を果たしていると言えます。

本日の発表は新宗教の活動を好意的に評しているように聞こえたことと思いますが、こうした在家仏教的な理念が日本人の宗教的社会的な情操を表出しているものだと考えており、それが現代社会の中で展開・機能している様相を新宗教の中にも

ちろん、十分に紹介できたとは思っておりませんが――見出そうとする試みと理解していただけるとありがたいです。ただ従来の宗教教団を所与のものとして実体化してしまうやり方は今や明らかに無理があり、その点でもカバーできなかった広大な部分が残っています。現代の宗教性を探究するためには、医療や教育や死をめぐる現場で発現しているものにもさらに耳を傾け、目を凝らし、感性を研ぎ澄ませる必要があることをもう一度指摘して終わります。

（注：本文は当日の発表内容を丁寧に起こしていただいた原稿に対して、余分な表現を削除し、言葉足らずで不明瞭のまま終わってしまった後半と結論の部分を補いました。その機会をいただきましたことに感謝いたします。）

六、質疑応答

司会 どうもありがとうございます。せっかくですので、質問を二三、受け付けたいと思います。

大橋修一 埼玉大学の大橋と申します。先生の今のお話は一九七〇年代の半ばから一九九〇年代以降のことだったと思いますが、それ以降、例えば二十年後などに、また新しい形で展開していくことはあるのでしょうか。

薄井篤子 ちよつとそれはわかりませんが、全く新しいのが生まれてくる、という感触は持っています。むしろ今までそれなりの歴史を持つているものが、時代の中で模索しながら変わっていくのを見ていこうと考えておりまして、これからもそうなるのではないのでしょうか。

大橋

古来より日本にある浄土宗、禅宗というものも、新しく形を変えながら発展していくというような方向があるのでしょうか。

薄井

今日は扱いませんでしたが、既成の伝統的な宗教の方が時代の中で取り残されないように必死に模索をしています。ただ、そうした宗教は長い歴史において担ってきた役割もあり、今までのやってきたものを捨てるわけにもいかないという意見もあって、非常に困難な状況にあります。葬式仏教に終わらない地域のセンターとしての寺を模索する動きは既に始まっております。ただ、伝統の象徴としてのみ君臨するのか、センターとして再生できるのか、そのゆくえは見えにくい状況ですね。

村上

謙 埼玉大学の村上と申します。貴重なお話をありがとうございます。ありがとうございました。私も葬式のシステムとしての仏教系の新宗教のあり方に少し関心があるのですが、先生は、仏教系の新宗教は、最近是在家主義とか体験談活動を通じて広まっているというお話をなさっていたかと思えます。宗教教団にトップダウン型とボトムアップ型があるとなれば、先生のお話は、ボトムアップ型の布教のあり方かなと思うのですが、それらの新宗教における開祖といますか、その団体におけるトップの位置付けというのはどうなのかということを考えるのです。というのも、我々が知っている新宗教といえ、やっぱりトップの人たちの影響力がかなり強いように思うのです。オウム真理教では麻原彰晃とか、創価学会では池田大作でしょう

薄井

か。彼らはかなり影響力が強いかと思うのです。そういう点ではかなり強力な組織化が行われているのではないかと僕は内心は思っていたのですが、先生は、強い組織化は行われていないとおっしゃられていたのです。その点についてお教えいただければと思います。ありがとうございます。あまり触れてほしくなかった点なのですが、非常に矛盾しているような気もするのです。仏教の理念として師弟関係は非常に重要ですから、トップダウンになりがち傾向は当然あります。特に以前は強力でした。その歪みがカリスマ的なリーダーシップを生み出してしまいう状況にはなっていたのですが、今回は、その反省を踏まえているという所を意識してお話しました。指導者に立つ人もある意味では普通の一般の素人であるということもあって「水平的」という表現をしました。近年はそこを強調して極端な指導者崇拜にならないような配慮をしているように見えます。それと関連しますが、現在の動向として同教団／同教派のメンバーにおいても地域や世代間などでの多様化も進んでおりまして、想像するほど単色でなくなってきました。ただ信者層の末端ではリーダー崇拜があるんじゃないかと言われると、そこは肯定せざるをえない所もあるのですけれども。

飯泉健司

埼玉大学の飯泉と申します。今回のお話で、学問的で客観的な点はよくわかったのですけれども、客観的に

ない、感情的なところを実はお聞きしたかったのです。というの、ここは教員養成の学部ですが、実際に教員になると、教え子の中に新宗教の信者の子どもたちも居ると思います。実際それは水面下に隠れていてわからないことが多い訳ですが、そういう人たちとどういう風に付き合っていけばいいのかというのをお聞きしたいと思います。例えば先生の体験の中で、こういうことは避けたいほうがいい、あるいはこういう事がわかったとか、こういうスタンスで付き合いなければいけなかったんだというようなことがあれば是非お伺いいたしたく思います。そういう子どもたちが教え子にいたらどうすればいいのかという所信があれば、お願いします。

薄井

大学などで宗教学を講義する場合には、今活動中の対象は扱いにくいものがあり、実際に私も扱いません。ただ、その歴史を振り返るだけの授業になってしまうと差しさわりのない（つまらない）内容になります。そこで出来るだけ信仰体験に注目して、生の声というか、信者の人たちがどういう気持ちで活動しているのか等々を紹介しようとは思っています。なるだけ手をくわえずに、どういう部分で救われて、どこでエネルギーを貰っているかという話をしようと心掛けています。その信者であるとか、親が信仰しているという学生はその方が好ましく思うようです。ただそれも難しいので、中々・・・。自分に直接調査経験があつて、ある程度内部の動向を理解しているような教団でなければ自信もって扱えません。

秋元祐哉

国立国語研究所の秋元です。今日は貴重な話をありがとうございます。面白く聞かせていただきました。単に興味の話になつてしまいかもしれないのですが、旧来から続いている宗教の印象として、来世と言ったらいいでしようか、死後の世界への意識が強いように感じます。天国と地獄みたいな感じになるかもしれませんが。今日のお話では、新宗教では、現世での利益に重点が置かれているように伺ったのですが、死というものは新宗教の中ではどのような形で扱われているのかをお伺いしたいと思います。来世について今までの宗教と同じ形で綴られているのか、あるいは現世がメインなので、死後の世界というのには踏み込んでいないのかというのを、是非お聞かせ願いたいです。

薄井

そこは役割分担みたいな所がありまして、新宗教は伝統的な宗教の役割や意義を否定しているわけでもないのですね。伝統的なお寺と上手く付き合いつつ、そして現実の方は新宗教で、という風になりますので、死の問題になると、先祖供養にしても死に対する教えの基本は引き継いでいると思います。

秋元

という事は、新宗教は「旧来の宗教+α」ということになつているという感じなのでしようか。

薄井

そうですね、死の問題については、新宗教は自分で実践するのが基本ですから先祖供養にしても自分たちで経文を読んで法会をおこないます。ただ、新宗教信者のほうが、一般の人たちよりもお寺との関係は強い、お寺さん

に熱心に通うという状況ですね。

司会 では質問はここまでとさせていただきます。貴重なお話を頂いた薄井篤子先生にお礼の気持ちをこめて大きな拍手を送りたいと思います。ありがとうございました。これで、平成二十年度大会を終了させていただきます。ありがとうございました。

① 「世俗化」についての議論は、バーガー・P／藺田稔訳 1979『聖

なる天蓋―神聖世界の社会学』新曜社、ドベラーレ・K／ヤン・スインゲドー、石井 研士 1992『宗教のダイナミックス―世俗化の宗教社会学』ヨルダン社など参照。バーガーは宗教と文化のさまざまな領域が、宗教の制度・象徴の支配から離れていくと指摘。しかし、九〇年代になって、文化的エリートに対抗する大衆が宗教的な形態をとり始めていると指摘して自分の見解を撤回した。

② ニューエイジは、西洋文明や近代合理主義、物質主義への反撥をカウンターカルチュアから引継ぎつつ、東洋文化や神秘主義への接近を強め、意識面の改革や精神性の変容を目指す運動として隆盛を見せた。エコロジーから超能力、フェミニズム、マクロビオティック、自己啓発、UFOに至るまで、現代に見られる多様なスピリチュアルなものはほとんど含まれていた。

③ 湯浅泰雄監修 2003『スピリチュアリティの現在―宗教・倫理・心理の観点―』人文書院、伊藤雅之・檜尾直樹・弓山達也編 2004『スピリチュアリティの社会学―現代世界の宗教性の探究』世界思想社、島蘭進 2007『スピリチュアリティの興隆―新霊性運動とその周辺』岩波書店、櫻井義秀編著 2008『カルトとスピリチュアリティ―現代日本における「救い」と「癒し」のゆくえ』ミネルヴァ書房など参照。

④ 「私事化」については、ルックマン・T／赤池憲昭、ヤン・スインゲドー訳 1963『見えない宗教―現代宗教社会学入門』ヨルダン社を参照。ダニエル・エルヴェーレジェは、諸個人が自分自身を国教に適合させる必要を感じておらず、その代わりに「ア・ラ・カルトの宗教」―ブリコラージュ―を実践していくと指摘。Hervieu-Leger, Daniele, 1990³ Religion and Modernity in the French context: For a new approach to secularization. Sociological Analysis 51, S:512-25

⑤ アメリカの政教の状況分析については多々出版されているが、最近の動きがよくわかるものでは、上坂昇 2008『神の国アメリカの論理―宗教右派によるイスラエル支援、中絶・同性結婚の否認』明石書店、ジョージ・S／森田成也他訳 2008『アメリカはキリスト教原理主義・新保守主義にいかに乗っ取られたのか?』作品社を参照。西欧の状況は内藤正典・阪口正二郎編著 2007『神の法 vs 人の法 スカーフ論争からみる西欧とイスラームの断層』日本評論社を参照。

⑥ 「公共宗教」についての議論は実に古く、宗教と社会の関係を論じた古代ギリシア・ローマ以来語られているが、公共宗

教の光と影については啓蒙主義末期のルソーが言い尽くしてもいる。現代社会における宗教の公的な意義については、ホセ・カサノヴァ／津城寛文訳1997『近代世界の公共宗教』玉川大学出版部を参照。

⑦日本人の宗教観については枚挙に遑がないが、阿満利磨1996『日本人はなぜ無宗教なのか』ちくま新書など。

⑧総信者数二〇八、八四五、四二九人中、神道系一〇六、八一七、六六九人(五一・一八%)、仏教系八九、一七七、七六九人(四二・七%)、諸教九、八一七、七五二人(四・七%)キリスト教系三、〇三二、二三九人(一・五%)『宗教年鑑 平成十八年度版』平成十七年十二月三十一日現在。

⑨日本社会では宗教団体への信頼度が極端に低い。そもそも日頃から関心も低く、接する経験もないため、印象が極端になりがちの傾向がある。石井研士2007『データブック現代日本人の宗教 増補改訂版』新曜社を参照。

⑩メディアの影響力については、石井研士2008『テレビと宗教 オウム以後を問い直す』中央公論社を参照。

⑪二〇〇二年から「癒しとスピリチュアルの大見本市」を標榜する「スピリチュアル・コンベンション」(通称「すぴこん」)が全国で開催されており、主催者によれば年間十一万人の動員数を持つ。

⑫最近の意識調査でも「なんらかの宗教を信じている人」は3割を切っているが、「先祖を敬う気持ちを持っている」と回答する層は増加気味、「自然の中に人間の力を超えた何かを感じる」も多数を占める。死者の魂も「生まれ変わる」と3

割が信じている。読売新聞社調査二〇〇八年の結果より。

⑬たとえば上田紀行2004『がんばれ仏教！—お寺ルネサンスの時代—』日本放送出版協会を参照。

⑭島菌進1992『新新宗教と宗教ブーム』岩波ブックレット、1996『精神世界のゆくえ—現代世界と新霊性運動』東京堂出版など参照。

⑮藤田庄市2008『宗教事件の内側—精神を呪縛される人びと』岩波書店を参照。

⑯各教団の機関紙や新聞に掲載された体験談を資料として配布。どれも信者たちの典型的な信仰の歩みや活動の様子が伝わるものとして選択したが、終了後すぐに回収したため、十分な参考にならずに反省している。

⑰立正佼成会は「齊家」をスローガンにして「家族同士の礼拝行」を推進している。

⑱ただ、さすがに家庭教育の学びに参加する父親も増えているし、父親の会も各地で生まれ始めてはいる。また、壮年・高年層の中に子育てを学ぶ会を主催するなどの動きもある。単親家庭や共働き家庭において孫の世話を担当する祖父母たちが増加したことを示している。

⑲たとえばここに取り上げた教団以外にも、在家仏教団体である妙智會は一九九〇年に『ありがとう基金』設立し、開教記念日にあたる設立日を「世界の子どものために祈る日」と定めた。二〇〇〇年には「子どものための宗教者ネットワーク(GNRC)」フォーラムを開催し、以後、ユニセフ、UNHCRなどの国連機関と協力しながら、世界各地の紛争や災害

による被災者への緊急支援、子どもたちの生存、発育のための継続支援など、子どもを取りまく環境改善に向けて活動を行っている。

⑳メレディス・B・マクガイア／山中弘，伊藤雅之，岡本亮輔 訳 2008 『宗教社会学 宗教と社会のダイナミックス』明石書店の「第8章 現代世界の宗教」（四二二頁～四八二頁）を参照。

表1 代表的「旧」新宗教教団

教団名	創始者	創立年	信徒数 (1974)	同 (1989)	同 (1999)	同 (2007)
天理教	中山みき (1798-1877)	1838	2,298,420	1,807,333	1,823,456	6,602,110
金光教	金光大神 (1814-1883)	1859	500,868	445,657	430,190	430,183
大本	出口なお (1837-1918)	1899	153,397	172,461	172,335	171,137
霊友会	出口王三郎 (1871-1948)	1924	2,477,907	3,165,616	1,754,535	1,577,786
	久保角太郎 (1892-1944)					
P L 教団 (ひとのみち)	小谷喜美 (1901-1971)	1946 [1925]	2,520,430	1,812,384	1,133,883	1,009,722
	御木徳一 (1871-1938)					
念法真教	御木徳近 (1900-1983)	1925	751,214	807,486	543,625	
生長の家	小倉霊現 (1886-1982)	1930	2,375,705	821,998	853,600	
創価学会	谷口雅春 (1893-1985)	1930	16,111,375	17,840,700	821 万世帯 [2000]	827万世帯
	牧口常三郎 (1871-1944)					
世界救世教	戸田城聖 (1900-1956)	1935	661,263	835,756	835,756	
立正佼成会	岡田茂吉 (1882-1955)	1938	4,562,304	6,336,709	5,856,939	4,288,466
	長沼妙佼 (1889-1957)					
天照皇大神宮教	庭野日敬 (1906-1999)	1945	386,062	454,442	460,860	472,698
	北村さよ (1900-1967)					
善隣教	力久辰斎 (1906-1977)	1947	483,239	513,953	269,854	255,590

信者数は『宗教年鑑』昭和50年版、平成2年版、12年版、21年版による。創価学会の項は、1974・89年は日蓮正宗の統計によって代用、2000年は『soka gakkai annual report2001』（創価学会広報室）から使用。

表2 新新宗教の主なるもの（1970年代半ば以降に発展した教団）

教団名	創始者	創立年	信徒数 (1974)	同 (1989)	同 (2000)	同 (2007)
エホバの証人 真如苑 顕正会	C・T・ラッセル 伊藤真乗 (1906-1990) 浅井甚兵衛 (1904-1984)	1945以前 1926 1935 1942	33,000* 296,514 12,000世帯	133,068 672,517 200,000*	221,364 786,358 [1999] 600,000*(1998)	935,828
大山祇命神示教会 靈法会 白光真宏会 山岸会 阿含宗 靈波之光教会 浄土真宗親鸞会 世界基督教統一神霊協会 世界真光文明教団 崇教真光 自然の泉	供丸斎 (1906-1988) 吉岡元治郎 (1898-1976) 五井昌久 (1916-1960) 山岸巳代蔵 (1901-1961) 桐山康雄 (1921-) 波瀬善雄 (1915-1984) 高森頭徹 (1934-) 文 鮮明 (1920-) 岡田光玉 (1901-1974) 浅尾法灯 (1953-)	1946-60 1948 1950 1951 1953 1954 1956 1958 1959 1959 1978 1960	59,463*	804,195 200,000* 500,000 1,800* 206,606 739,708 100,000*(1984) 420,000* 87,006 448,483 750,000*	811,822 [1999] 600,000 2,500 315,198 [1999] 913,245 [2001] 400,000 [1999] 110,000 [2001] 800,000	
ほんぶしん ジー・エル・エー総合本部 神慈秀明会 ラジニーシ瞑想センター 日本聖道教団	大西 玉 (1916-1969) 高橋信次 (1927-1976) 小山美秀子 (1910-) 和尚ラジニーシ (1931-1990) 岩崎照皇 (1934-)	1961-75 1961 1969 1970 不明 1974		900,000* 12,297 440,000*(1988) 3,000*(1984) 58,950	20,299 450,000 3,000 [1999] 103,859 1,177	
法の華三法行 ス光光波世界神団 日本ラエリアン・ムーブメント オウム真理教 ワールドメイト 幸福の科学	福永法源 (1945-) 黒田みゆのる (1928-) C・P・ラエル (1946-) 麻原彰晃 (1955-) 深見東州 (1951-) 大川隆法 (1956-)	1976-90 1980 1980 1980 1984 1986 1986		70,000* 4,500 3,000* 4,000* 30,000* 13,000*	100,000 7,000 5,500 1,177 41,864 10,000,000 以上	

信者数は『宗教年鑑』に拠った。*印はそれ以外の資料による、ほぼ同じ時期の教団側の教団側の公称信徒数。

外来の教団は日本組織の創立を創立年とした。島菌進 2001 『ポストモダンの新宗教—現代日本の精神状況の底流』 東京堂出版参照。